
魔法先生ネギま ネギTS成り代わり小説

多摩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま ネギTS成り代わり小説

【Nコード】

N6419Q

【作者名】

多摩

【あらすじ】

私は、自殺した。

イジメに合って耐えられなくなって死んだ……

と、思ったらあの世に居て全知全能の神ゼウスによってチート能力を貰い転生した。

そこは、何と魔法先生ネギまの世界でしかも私は主人公のネギに成

り代わって居た……

私は、絶対にあんな偽善者集団にはならない……。

初の、魔法先生ネギま小説です。

しかもアビスとの混合小説でもあります。まだ、完成して居ない小説もあるのに書いてしまいました。

まあ、残りの小説と合わせて完結出来るよ頑張ります。

※アビスキャラは、フリルク♀の二人が出ます。

始めに

この話は、ネギ成り代わり小説です。

はつきり言って、この話では所々原作ブレイクや正義の魔法使いⅡ立派な魔法使いにアンチ表現やTS表現や性的（強姦）表現があります。

タイトルにも、ありますが女体化成り代わりです。

とにかく、主人公は正義の魔法使いにはなりません。

原作と異なる表現などが出ます。

それが、嫌なら戻るを押して下さい。

それでは、次から話を開始します。

後、この小説は不定期更新ですのでよろしく願います。

第一章：何か薬味野菜少年に成り代わりするみたいです！！（前書き）

次は、キャラ紹介です！！

第一章：何か薬味野菜少年に成り代わりするみたいです!!

あれ、確か僕は楽器の屋上から飛び降りたはず…

「やあ、起きたのかい。」

『あなたは、誰ですか?』

「儂か、全知全能の神ゼウスじゃ!!」

『え、あのギリシャ神話に出てくるあのゼウス?!』

「そう言うて織るじやろう。」

『その、ゼウスさん?が僕に何の用ですか。』

「お主、いじめられて学校の屋上から飛び降り自殺したじやろう。」

『ッ、そうですよだから何ですか神様のあなたにいじめられていて自殺するしかなかった僕の気持ち分かる訳ない。』

「そうじゃの、儂にそなたの気持ちは分からんだからそなた転生してみないか?」

『転生て、あのよく携帯小説を書いて居る人達のキャラがアニメや漫画やゲームの平行世界にチート能力を貰って暴れる事が出来るあの転生ですか。』

「?そうじゃ、だからそなたにチート能力を選んで貰ってある世界

に行って貰う。」

『分かりました、僕転生してその世界に行きます!!』

「分かった、それじゃあ欲しいチート能力を言うてみる。」

『それじゃあ、これとこれとこれとこれをお願いしますか?』

「ふむ、大丈夫じゃ。」

『なら、僕が行く世界を教えて貰えないでしょうか。』

「そうじゃのそなたが行く世界は、魔法先生ネギまの平行世界でもTSで主人公のネギに成り代わって貰う。」

『ええ、何で僕がああの野菜君に成らないといけないですか!!』

「それは、自殺したそなたの儂からの罰じゃ。」

『分かりました、僕行きます。』

「そうかなら、そろそろ送るぞ。」

ゼウスは、そう言い僕は光に包まれて消えた……

これから僕は、過酷な運命と運命な出会いが待って居るとはこの時知るよしもなかった

第一章：何か薬味野菜少年に成り代わりするみたいです！！（後書き）

とにかく、頑張ってくださいるので応援宜しくお願いします。

キャラ紹介（前書き）

更新です！！

キャラ紹介

名前 ユフィエル・スプリングフィールド

身長 164

体重 秘密

容姿

髪の色と瞳の色は、父ナギ似で顔立ちは母アリカ似である。

特殊能力

一つ目

主人公が知って居るゲームや漫画やオリジナル魔法などの魔法や武術の技が使える

2つ目

魔力は、父ナギの約20倍（但し、修行をする事で魔力が増えている。）

3つ目

魔法の属性を、全属性使える用にする

4つ目

ワンピースの六式の技全部使える。（後、身体強化魔法でオリジナル六式が使える。）

5つ目

IQを、300にする。

設定

主人公は、学校でイジメられていてイジメに耐えられなくなり学校の屋上から飛び降り自殺して死んで白い空間で全知全能の神ゼウスによってチート能力を貰い自殺した罰として魔法先生ネギまの主人公のネギ・スプリングフィールドに成り代わりさせられた……

始動キー

ライエル・クロス・アミリエ

まあ、原作の始動キーと違いますが悪しからず!!

キャラ紹介（後書き）

次は、生まれてからの話を更新します。

第二章：魔法学校卒業そして、新たな旅立ち（前書き）

更新しました

第二章：魔法学校卒業そして、新たなる旅立ち

こんにちは、ネギ・スプリングフィールドに成り代わり転生しました、ユフィエル・スプリングフィールドです。

私が成り代わり転生してあれから9年が経った。

私が産まれてから数日、目が開けられるようになり辺りを見渡すと父ナギと母アリカは何か言い争って居た私はああそろそろ父の故郷のウェールズに預けるんだなと思いました。

それから、しばらくして私はお父さんと一緒にウェールズに行き祖父コーネリウスに預けられた……（まあ、預けられた間色々な事が合ってネカネ姉さんとアーニャにバレないように六式の練習や武術の練習やオリジナル魔法の練習にこの七年間費やしたけどね……これに付いては番外編で）

そして、私は今日7年間過ごした魔法学校を卒業する日である。

「卒業証書授与ーユフィエル・スプリングフィールドさん！この七年間よくがんばってきただが、これからの修業が本番だ気を抜くでないぞ。」

『はい！！』

そして、卒業式が終わり私とネカネ姉さんとアーニャは学校の廊下を歩いて居た

「ユフィは、修業場所何て書いてあった？私はロンドンで占い師よ。」

『今、浮かびあがるところだよ。』

私は、そう言いネカネ姉さんとアーニャと一緒に卒業証書を見た

「お……………どう？」

『えくと…』

そして、浮かび上がった文字はA—T E A C H E R—I N—J A P
A Nと書いて合った……

「日本でー」

「先生をやること。」

「「『ええ〜っ!?!?』」」

私とネカネ姉さんとアーニャは、祖父であり校長であるコーネリウ

スの所に向かった

「こ、校長「先生」ってどーゆーことですか!？」

「ほう……「先生」か……」

「何かのマチガイではないのですか? 10歳で先生など無理です。」

「そうよ、ユフィったら私より可愛いし天然だし……」

アーニヤ、私は可愛いくないですよと心の中で呟いた

「しかし卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ立派な魔法使いになるためには頑張って修業してくるしかないのう。」

「ああっ」

「『あ、お姉ちゃん／ネカネ姉さん。』』

「ふむ……安心せー修業先の学園長は儂の友人じゃからのま、がんばりなさい。」

「……」

『ハイ、わかりました!!』

まあ、正義の魔法使いには成りたいとは思わないけど頑張りますか!!

こうして、私は日本にある麻帆良学園で学校の先生をする事になった

第二章：魔法学校卒業そして、新たなる旅立ち（後書き）

次は、いよいよ麻帆良の話です。

第三章：生徒の二人との出会いとデスメガネ（笑い）との再会（前書き）

更新です

第三章：生徒の二人との出会いとデスメガネ（笑い）との再会

こんにちは、ユフィエル・スプリングフィールドです。

私は、今日本に来て居ます

その理由は、卒業証書に修業場所が日本の麻帆良学園と言う場所
で先生をする事だった。

まあ、原作通りで先生をする事になった訳で今私は電車に乗り麻帆
良学園に向かって居る

『（相変わらず、人は一杯ですね。）』

そんな事を、思っ居たら……

次は、麻帆良学園中央駅

と、アナウンスが流れて電車を降りた

『ヤバイ、初日早々から遅刻はまずいよね。』

いやいや、普通に有り得ないからby…多摩

何か、空耳が聞こえたけど何だったんだろ？

私は、六式の一つ剃を使って学園に向かった

「やばいやばい、今日は早く出なきゃいけなかったのに。でもさ学園長の孫娘のアンタが何で新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないの。」

「スマンスマン」

「学園長の友人なら、そいつもじじいに決まってるじゃん!!」

「そうけ?今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ。」

「え、マジ!??」

「ほらココ、しかも好きな人の名前を10回言って「ワン」と鳴くと効果ありやて。」

「うそっ!?!高畑先生高畑先生高畑先生高畑先生高畑先生(以下略)」

「あははは、アスナ高畑先生のためなら何でもするわ。(ホントにやるとわ…)」

「殺すわよ……」

「えーと、次は逆立ちして開脚の上全力疾走50Mして「ニャー」と鳴く……」

「やらねえー!!」

「にしても、アスナ足速いよね私はコレやのに。」

「悪かったわね、体力バカで。」

ふわっ

「ん」

「あの、麻帆良学園でここを真っ直ぐですか？」

「此処は、麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリアで初等部は前の駅やよ。」

「そうよ、小学生は此処に入ってはいけないの。」

『いやあの、私は………』

「いや、いいんだよアスナ君。」

「え、高畑先生!？」

『久しぶりです、タカミチ。』

「お久しぶりです、ユフィ君!」

「!?!?!?!?!っし、知り合い?!?!?!」

「麻帆良学園へようこそいい所でしょう? 「ユフィ先生」」

「え?!?!?!?!?!せ、先生?」

「?!?!?!?!」

『あ、ハイそうです。この度この学校で英語の教師をやることになりましたユフィエル・スプリングフィールドです?!?!?!』

「え?!?!?!?!?!ええゝっ」

こうして、私の波乱の学園教師生活が始まった

第四章…まさかの協力者との出会い!! (前書き)

ルークとアスランを出しました。

しかも、二人共先生です。(魔法先生でもあります)

第四章…まさかの協力者との出会い!!

こんにちは、ユフィエル・スプリングフィールドです。

私は、今近衛木乃香さんと神楽坂明日菜さんと学園長室に居る

「学園長先生!! 一体どうゆうことなんですか!？」

「まあまあ、アスナちゃんや。なるほど修業のために日本で学校の先生を……そりやまた大変な課題をもううたのー」

『はい、よろしく願います。』

「しかし、まずは教育実習とゆうことになるかのう。」

『はあ』

「今日から3月までじゃ……」

「だ、大体子供で女の子が先生なんておかしいじゃないですか。しかもうちの担任だなんて……」

『……………（確かに、私も漫画を見て思ったけど高々数え歳で9歳の子供に^{ネギに}学校の先生をさせるなんて（狸じい）共は頭がイカレているんだな）』

と、ユフィは思っ居た……

「ユフィ君、この修業はおそらく大変じゃぞ。」

『はあ（まあ確かにエヴァやエヴァやアスナやアスナが居るからな……）』

「ダメだったら、故郷に帰らなければならん二度とチャンスはない
がその覚悟はあるのじゃな？」

『はい、やらせて貰います。』

「……うむわかった！では今日から早速やつてもらおうかの指導教
員のルミア先生とアスラン先生を紹介しよう。ルミア君・アスラン
君」

『へ？（ルミア先生？アスラン先生？あれ確か指導教員はしずな先
生と言う人だったような？まさか私以外にイレギュラーが！？）』

ユフィは、そう思いながらドアの方を見た

「「はい」」

ドアから、入って来たのは……

『！？（ええ何でアビスのルークとフリングス少将がネギまの世界
に居るの）』

「おっ、ごめん見えなかったぜ（お前がユフィエルだな？）」

「学園長、彼女が教育実習生の子ですか？（君は何故私とルミアが
此処に居るかは後程教えますので今は……）」

『は、初めまして私はユフィエル・スプリングフィールドと申します。よろしく願いしますルミア先生・アスラン先生（分かりました、後程教えて下さいね……）』

「「ああ、よろしくユフィ／ユフィ君（ちゃんと、分かって居るよ／ますよ。）」」

「そうそう、もう一つこのか・アスナちゃんしばらくはユフィ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？へまだ住むとこ決まっとらんのじゃよ」

「げ、絶対嫌ですよ私は!？」

「かわえーよこの子」

「ガキは、キライなんだってば!!とにかく私は絶対に反対よ。」

「困ったの」

そんな時

「なら学園長、俺達の家泊めても良いぞ」

「ルミア先生、しかしのう」

「学園長、私達は大丈夫ですから。」

「そなた達が、そう言うなら分かった。アスナちゃん・木乃香もすまんないな突然」

「別に……」

「もう、アスナたら!!」

「ユフィ君の住む所も決まった事だしアスナちゃん・木乃香は教室に戻ってよいぞ」

「分かったえ、じゃあまた後でなユフィ先生」

「……………」

木乃香は、ユフィにそう言いアスナと学園長室から出て教室に向かった

「さて、ユフィ君君には教育実習に付いての話は先話した通りルミア先生・アスラン先生からから聞くと良い……次は修業に付いてじゃ」

『はい!!』

「そなたの修業は学園の警備を主にしておうかの。」

『学園の警備ですか?』

「そうじゃ、この学園には一応結界を貼っておるが極たまに生徒達やこの学園を狙って居る輩が来ることがあるのじゃ。そう言う輩を倒すのもそなたの修業にもなる話を受けてはくれぬか」

『分かりました、学園の警備の話受けます。』

「そうか、受けてくれるか警備に付いてはルミア先生・アスラン先生に聞くと良い」

『分かりました。』

「さて、話も少し長くなったがルミア先生・アスラン先生・ユフィ君を頼んだぞ」

「「ああ／分かりました」」

ルミアとアスランとユフィは、学園長室から出て教室に向かった

次回に続く

第四章…まさかの協力者との出会い!! (後書き)

次回は、ユファイが2―Aの皆さん（一部以外）との会話です。

第五章：2-Aの皆さんとの出会いと魔法使いである事がバレそうになったあそ

更新です

第五章：2－Aの皆さんとの出会いと魔法使いである事がバレそうになったあ

学園長室から、ルミアとアスランと一緒に教室に向かって居るユフイエル・スプリングフィールドです。

『えーと、ルミア先生・アスラン先生此处で合ってますか2－Aは？』

「ああ、此处が2－Aだぜ。」

「それとこれ、ユフイ君。」

ユフイは、アスランからクラス名簿を渡された

「先に、俺達が入るから呼んだら入って来てな。」

『分かりました。』

ルミアは、ユフイにそう言い2－Aにアスランと入って居た……が
ボフツ

「誰だ、教室のドアの上に黒板消しと下にひもで罠などを作ったのは今すぐ正直に喋らないと新田先生の説教フルコースを用意するぞ」

ルミアが、そう言うのと黒板消しを上挟んだのと罠を作ったのは春日美空と鳴滝風香と鳴滝史伽だった

「そうかそうか、君達かよし正直に自分達で喋ったから俺とアスラ

ン先生の課題プリントをやって貰おう。」

ルミアが、そう言うとき春日美空と鳴滝姉妹はもう二度としませんから課題プリントを出さないで下さいと土下座をして謝りだした

「ルミア先生、そこまでにして教育実習生の子を呼びましょう。」

「そうだな、よし今からこのクラスに新しい先生を紹介する入って来て良いぞ。」

ルミアは、外に居るユフィに教室に入ってくるよ声を掛けた

『失礼します。』

ユフィは、ルミアの声が聞こえたので教室に入った

「この子が、お前達の新しい先生だ。ユフィ挨拶してくれ」

『えーと、私はこの学校で英語を教えることになりましたユフィエル・スプリングフィールドです。3学期の間だけです。がよろしくお願いします』

「……………」

『？（あれ、私何か失敗した！！）』

ユフィが、そう思っていたら

「」「「きゃああっあ、かわいいい？」」「」

『はい？（私可愛くないんだけどな。）』

いやいや、可愛いからしかも母親似だからb y多摩

あれまた、空耳が聞こえた

ユフィが、そんな事を思っていたら

「はい、此処は魔帆良報道部の私朝倉和美に任せなさい。」

朝倉は、そう言うとユフィに質問して来た

「では、ユフィ先生出身地はどこですか？」

『えー、イギリスのウェールズと言う所です』

「歳はいくつですか」

『9歳です数え歳で10歳になります。』

「マジですか!!」

『はい、マジです。』

「そうですか、では次の質問今どこに住んでるですか」

『えーと……………』

ユフィが、答えに困って居ると

「ユフィは、俺とアスランの家に住む事になって居る」

「本当なんですか、アスラン先生!!」

「ええ、本当ですよ。」

アスランは、普通に答えた

『えーと、朝倉さん?でしたけまだ質問ありますか?』

ユフィは、朝倉にまだ質問があるのか聞いた

「では、最後の質問このクラスをどう思いますか」

『えーと、まだ来たばかりでよく分からない事や名前を覚えていませんが元気が合って頑張っで行けそうな気がします。とにかく皆さんと仲良く慣れるよう頑張りますのでよろしくお願いします!!』

パチパチパチパチパチパチパチ

拍手が、鳴り響いた

「よし朝倉、質問はもう良いだろう?」

「はい、もう大丈夫です。」

「えー、ユフィ君は教師資格を持ってるけど見ての通りあなた達より年下なのでお手柔らかにお願いしますよ。」

「「「ハ―イ」」」

そんなこんなで、授業が終わった

キーン

コーン

カーン

『ふーやっと一段落ですね…（それにしても朝のあの子あれだよ
確かお母さんの妹だったよね……………歳いくつだよ!!）』

ユフィが心の中でアスナの事を考えて居た時

『ん？あれ…………あの子は確か27番の宮崎のどかさん…（あれ確か
…………足元が見えなくて）』

ユフィが、そんな事を思っていたら……

「あっ」

『!!（やっぱり!!）』

ユフィは、虚空瞬動を使つてのどかを助けた

『あ、大丈夫ですか？宮崎さん……』

「今のアンタ……」

『神楽坂さん、今の見たんですか？』

「コクッ」

『あれは、武術の移動術の瞬動ですよ。（ヤバいときに虚空瞬動使ったけど刺使わなくて良かった……）』

内心そんな事を、考えていたら

「そんなんだ、私てっきり魔法を使ったのかと思ったわよ。」

『そんな訳無いじゃないですか神楽坂さん魔法何てゲームや小説じゃあるまいし』

「そうよね、それにしてもアンタ武術何かしてるんだ。まあ良いわそれより本屋ちゃん大丈夫？」

「うん、大丈夫だよアスナさん。」

「それなら、良いけど。それじゃあ私はちょっと急いで居るから」

アスナは、そう言い走って行ってしまった

『本当に、大丈夫ですか宮崎さん……』

「はい、本当に大丈夫ですよユフィ先生」

『そうですか、なら私は職員室に行きますね。』

ユフィは、のどかにそう言い職員室に向かった

職員室に着いたユフィはその後、ルミアとアスランとタカミチに2
—Aの教室に連れて行かれそこでユフィの歓迎会に参加して委員長
の雪広あやかから何時作ったのか銅像を渡され困っていたらアスナ
があやかと喧嘩を始めて色々な事も合ったが何とか歓迎会は無事終
了しユフィはルミアとアスランと帰って行った

次回に続く

バレンタインデー企画対談話（前書き）

ユフィの彼氏をフェイトから小太郎に変えたので新しく更新しました。

バレンタインデー企画対談話

「今晚、作者多摩です今日はバレンタインデーなので私が書いて居る小説の主人公の嫁さんとただ一人の女主人公の皆さんを呼びました。」

「妾は、ワンピース転生最強小説の主人公のモンキー・D・シズナの彼女のボア・ハンコックじゃ。」

「私は、NARUTO最強転生く九尾の申し子の主人公のうずまきシズナさん嫁のうずまき白です。」

「私は、魔法先生ネギまTS成り代わり小説の女主人公で犬上小太郎の彼女のユフィエル・スプリングフィールドです。」

「今日皆さんを読んだのは、旦那さんや彼氏をどうって居るかを聴きだいたい思い皆さんを呼びました。」

「なら最初は、妾からじゃの。」

「分かりました、ハンコックさんから見たシズナはどんな存在ですか？」

「そうじゃの、妾から見たシズナは優しいくて・兄妹思いや仲間思いで妾が嫉妬するぐらいに仲が良いのじゃまあ妾が一番じゃがのう。」

「そうですか、ハンコックさんありがとうございます。次は白さんあなたにとってシズナ君はどんな存在ですか？」

「私から見たシズナさんは、ハンコックさんと同じく妹のルナちゃんに優しく仲間思いで子供達から見ても頼れるお父さんで勿論僕にも優しいですよ。」

「はい、分かりました白さんありがとうございます。次はユフィエルさんどうぞ。」

「私から見た、小太郎は面白くて優しくて強くてツンデレで犬耳が可愛くてさわれるのは私だけで誰にでも優しいのが彼の良い所です。」

「そうですか、最後に小説を読んで貰って居る皆さんに一言お願いします。」

「「「これからも、私・妾・僕達の活躍を楽しみにして下さい。」」」

「これで、バレンタインデー企画を終わります次はホワイトデー企画で男子の皆さんに来て貰います。」

それでは、皆さんまた会いましょう!!

バレンタインデー企画対談話（後書き）

すいません、少し書き直しました。

第六章：初授業と原作キャラとの会合？（前書き）

更新です……

第六章：初授業と原作キャラとの会合？

こんにちは、私の歓迎会の後ルミアさんとアスランさんと帰って二人の住む家に着いて色々な話をしたユフィエル・スプリングフィールドです。

えーと、ルミアさん達の話によるとお二人はローレライとゼウスによって私を助ける為にルミアさんは完全同位体現象回避の為に性転換してネギまの世界の10年前の京都に飛ばされて関西呪術協会の近くを散歩して居た長である近衛詠春に会ってそれで詠春さんの助けを借りて学校の先生の資格を取り魔帆良学園に来たと教えられた

朝

私は、包丁の音を聞いて起きた

「お、起きたのかユフィおはよう。」

『おはようございます、ルミアさん。』

「すぐに、朝ご飯出来るから顔洗ってきな」

『分かりました。』

私は、ルミアさんに言われて洗面所に向かい顔を洗いに行った

『「いただきます!!」』

顔を洗い終わり、食卓の上にある朝ご飯をルミアさんと一緒に食べ始めた

『あれ、アスランさんはどうしたんですか?』

「ああ、アスランならもう出勤したよ。あの人の受け持って居る科目は社会科で三年の歴史の先生だから昨日の内に準備して居た物を最終確認して授業で使うから先に学校に行ったわけ。」

『そんなですか、ルミアさんは何の担当科目の先生何ですか?』

「俺か?俺は数学の担当でアスランと同じ三年を担当して居る。」

そんな話をしながら朝ご飯を食べてユフィはルミアと一緒に出勤したルミアさんと出勤し教室に向かう途中雪広あやかさんに会い教室まで一緒に向かう事にした

ガラガラ

『おはようございます、皆さん。』

「」「おはようございます、ユフィ先生!」「」

『はい、おはようございます。元気ですね皆さんでは一時間目をはじめます。テキスト76ページを開いて下さい。』

.....The fall of Jason the flower. Spring came. Jason the flower was born on a branch of a tall tree. Hundreds of flowers were born on the tree. They were all friends. (ちなみに、この英単語を訳すと「花のジェイソンが落ちる時。春が来た。花のジェイソンは大木の枝で生まれた。その木では何百年もの花が生まれた。彼らはみんな友達だった。」と訳すのだけど)ー今の所誰かに訳して貰いたいのですが.....え〜と:..』

私が、皆さんを見ると

サッ.....

と、目を反らされた仕方ない此処は.....

『分からないみたいなので私が訳しますね。(ハア、仕方ない本当なら原作みたいにアスナさんに訳して貰おうと思ったけど雪広あやかに馬鹿にされて授業が終わってしまうからな)「花のジェイソンが落ちる時。春が来た。花のジェイソンは大木の枝で生まれた。その木では何百年もの花が生まれた。彼らはみんな友達だった。」と言う事になります。今回は私が訳しましたが次回からは皆さんに当てていきますので勉強して居て下さいね、では次に行きます。』

その後、何とか私は初めての授業を終わらして職員室に向かった

『ハア、初授業疲れた。』

と、私が机でうなだれて居ると

ガラガラ

「あの、ユフィ先生……」

『え……あ、はいっ!?!』

「すみません、ユフィ先生朝の授業について質問が」

『はい、良いですよ入って来て。』

「」「失礼します。」「」

『えーと、確か……14番早乙女ハルナさんと4番の綾瀬夕映さんでしたけ?』

「あ、私じゃなくてこっちの子何ですけど。」

『えーと、宮崎さんでしたよね?何か解らない所でもありましたか?』

「えーと、その………此処何ですけど。」

『ああ、此処はこうこう何ですよ？』

「そうなんですか、何とか分かりましたありがとうございますユフイ先生。」

『いえ、私は先生ですから教えるのは当たり前ですよ。』

その他、夕映さんとハルナさんにも解らない所を教えて教師生活2日目が終わった

次回に続く

第六章：初授業と原作キャラとの会合？（後書き）

次回も頑張ります。

第七章：何か、期末テストが憂鬱です（前書き）

少し、修正しました。

第七章：何か、期末テストが憂鬱です

こんにちは、ユフィエル・スプリングフィールドです。

えーと、あの2日目の授業から色々ありました。

何が合ったかと言うと私のクラスのバカ五人衆に居残り授業をやったりドッジボールで麻帆良学園聖ウルスラ女子校と勝負したり色々な事がありました。が何とか解決して事なきを終えたのだった

そんな訳あるか！！by多摩

また、空耳が聞こえたけどまあ良いかとにかく今日も頑張ってください

ユフィは、そう思いベッドから起き上がり着替えて台所に向かいルミアの手伝いをしてアスランとルミアと朝食を食べて二人と一緒に学校に向かった

『じゃあ、今のところを訳してもらいます。えーと……じゃあ、元気に挨拶をしてくれた佐々木さん!』

「Σえーユフィ先生ひどいー挨拶して損したーっ」

「ユフィ先生訳なら私が……!」

「いいんちょハーフだからだめー」

「なっ……ハーフじゃありませんわよ。」

学園長室

「そうか、なかなかうまくやっとなるのかユフィ君は」

「ああ、学園長俺とアスランから見ても生徒達とも打ちとけて居るし授業内容もバカ五人衆でも解るぐるいに楽しめる見たいだぜ。」

「フオフオ、そうかけっこうけっこうでは4月からは正式な教員として採用できるかのう。ご苦労じゃったルミア君・アスラン君!! ーただしもう一つ……は? 彼女にはもう二つ課題をクリアしてもらおうかの才能ある立派な魔法使いの候補生としてー」

「学園長、此処には俺とアスランしか居ないからいいけど先程の立派な魔法使いと言う言葉には気を付けてくれよ?」

「そうですよ、学園長。」

「……………そうじゃの、気を付ける事にする。」

ルミアとアスランが学園長と話していた頃、ユフィは明石裕奈と椎

名桜子と廊下を歩いて居た

『ーん？……何か他のクラスの皆さん、ピリピリしてますね？（も
しかして……）』

ユフィが、そう言う

裕奈が……

「あーそだね、そろそろ中等部期末テストが近いからね。」

「来週の月曜からだよユフィ先生」

『はあー来週からって、こうしてはいられない私職員室に行きます
ね。』

ユフィは、裕奈と桜子にそう言い職員室に走って居た

「どうしたのかな、ユフィ先生？うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係ないと思うけどな」

「そうだよね、特に2―A何てずーっと学年最下位だし今回も大丈夫でしょう。」

裕奈と桜子は、そう言い教室に帰って居た

二人は知らない、この期末テストがユフィにとって大きな意味を持つ事を……

そして、まさかバカ五人衆が大変な事を考えて居たとはこの時ユフィは思いもしなかったのであった

次回に続く

第七章：何か、期末テストが憂鬱です（後書き）

次回も、頑張ります。

第八章：図書館で、初激怒！！（前書き）

台北お待たせしました、第八章更新です。

第八章：図書館島で、初激怒！！

こんばんは、ルミアさんとアスランさんと夕飯を食べて居るユフィエル・スプリングフィールドです。

『ルミアさんこれ、とっても美味しいです。』

「そうか、作ったかいがあるぜ。」

「さすが、私の綺麗な奥さんですね。」

アスランさんが、ルミアさんが作った料理を絶賛すると……………

「Σ何、恥ずかしい事言うんだよアスラン！！」

ルミアさんは、照れ隠しにアスランさんの背中を叩いた。

「グヘッ!？」

『Σア、アスランさん大丈夫ですか!？』

「ゲホッゲホッ、大丈夫だよユフィ君。ル・ミ・ア？」

アスランさんは、心配する私に苦笑いしながら大丈夫と言いその後ルミアさんに黒い笑みを向けた

「Σな、何だよアスラン。」

ルミアさんは、黒い笑みをしながらこちらを向くアスランさんに顔

をひきつり……

「ル・ミ・アは、あちらの私達の寝室で私と☆O・H A・N A・S
I ☆しましうね？」

アスランさんは、ルミアさんに黒い笑みでそう言いルミアさんを担
ぎ上げ自分達の寝室に向かった。

「あ、アスランごめんなさい二度としないからあのお仕置きはやめ
て〜!!！」

ルミアさんは、大きな声でアスランさんに謝ったが結局……

「イヤああー!!！」

「まだまだ、これからだよルミア？」

私は、お二人と自分が食べた夕食を片付け皿を洗っていた時には何
やらお二人の寝室から淫声が聞こえて来たが無視しながら皿を洗っ
た。

皿を洗い終わった私は自分の部屋に戻りこの前の休みにルミアさんとアスランさん達と買いに行った携帯を開いたら学園長から電話が着ていたので電話する事にした。学園長に電話してどのような用件か聞くと2ーAのバカレンジャーの神楽坂明日菜さん達が図書館島にある魔法の本（メルキセデクの本）を探す為に侵入したので私に明日菜さん達を探して図書館島から出して欲しいと言う事だった。私はそれを了承しルミアさんとアスランさん（淫声は、終わって）に学園長から電話があり図書館島に入った明日菜さん達を助ける事を行い家を出て図書館島に向かった。

図書館島入り口前

『ハア、3日後には期末テストがあるというのに…………。』

ユフィは、溜め息を吐きはがらボソツと言いながら図書館島の中に入っていた。

その頃、バカレンジャーは？

「気持ちアル！！」

「そうでござるな。」

「本が一杯あるから一生此処にいても良いかな。」

「そうやな、此処あったかくて本間樂園みたいや。」

「そんな事より、早く勉強やらないとヤバイわよ。」

「まあまあ、明日菜も水浴びしようよ。」

上の順番で、古葦と長瀬楓と綾瀬夕映と近衛木乃香と佐々木まき絵と神楽坂明日菜のバカレンジャー5人組と+aの声だった。

「明日菜の言う通りやみんなそろそろ勉強しなアカンで。」

木乃香が、そう言うとき……

『近衛さんの言う通りですよ、み・な・さ・ん？』

どこからともなく、どこか黒い声がバカレンジャーと+aは聞こえて首をオイルが切れた機械人形みたいにギツギツとしながら後ろを向くとそこには某死神の四番隊隊長のような黒い笑みを浮かべたユフィが居た。

「「「「「ゆゆゆ、ユフィ／君／先生／嬢！？」「」「」「」」

『近衛さん・佐々木さん・古菲さん・長瀬さん・神楽坂さん、先生を付けて下さいね?』

今だに、黒い笑みをしながら5人に言った。

「それより、何であんたが此処に居るのよ。」

パン

広い場所に、乾いた音が鳴り響いた。

『何故、私が此処に居るかは学園長からあなた達が図書館島に侵入したと連絡が合って私はあなた達を此処から出す為に来たんです!』

ユフィは、泣きながら明日菜達に説教をし始めた。

説教から、30分後ユフィは泣き止み明日菜達はヘロヘロとうなだれて居た。

『とにかく、地上に戻りますよ。』

ユフィが、そう言う………

「Σちよつと待つアルよ!!」

古達が、ユフィに待ったと言った。

『何か、古蕐さん?』

「ワタシ達、魔法の本を探し………に。」

『何か?』

古蕐が、魔法の本を探すと言おうとしたらユフィの黒い笑みを見て

「イエナンデモアリマセン。」

カタコトになりユフィにそう言った。

それから、明日菜達はユフィにより地上に戻り図書館島を後にした。
それから、明日菜達は地上に戻ってユフィによる勉強により21A
は期末テストでトップクラスになった。

次回に続く!!

第八章：図書館で、初激怒！！（後書き）

次回は、千雨の話を更新します。

第九章：千雨さんとの初会合と期末テスト終了パーティー（前書き）

少し、直しました。

第九章：千雨さんとの初会合と期末テスト終了パーティー

おはようございます、今日終了式の為ルミアさんとアスランさんと朝早くから学校に向かって居るユフィエル・スプリングフィールドです。

『うーん、良い天気ですね。』

「そうだな、終了式日和だ。」

「確かに、今日は良い日になりそうですね。」

ユフィ達3人は、歩きながら空を見ながらそう言った。

「ユフィ先生、おはようございます。」

『はい、おはようございます佐々木さん。』

「ユフィちゃん、おっはよー。」

『はい、おはようございます椎名さん!!』

ユフィが、佐々木と椎名さんに挨拶してユフィの前方に眼鏡を掛けた長谷川千雨が本を読みながら歩いて居た。

『あ、おはようございます長谷川さん!!』

「……………」

「んー、2ーAでも特に目立たない方の千雨ちゃんまで覚えてる何てユフィちゃんは教師の鏡っ!!」

『私は、まだまだですよ椎名さん。私より新田先生の方が凄いですから……。』

ユフィと椎名は、そう言いながら学校に向かって行った。

「ーったく、遅刻でもないのになに元気に走ってんだあいっら……
…ガキ……。」

千雨は、そう言いながらまた本を読みながら学校に向かって行った。

三学期終了式

外で、行われて居る終了式で学園長からの新年度の連絡が行われた。

「フオフオフオ、皆にも一応紹介しておこうー新年度から正式に本

校の英語科教員となるユフィエル・スプリングフィールド先生じゃ
！！ユフィ先生には4月から「3ーA」の担任をしてもらう予定じ
ゃ。」

オオッ

他のクラスの生徒や2ーAの他のみんなが、ユフィが先生をする事
を喜んで居る時千雨は……

「（Σなっ…何い…っ！?）」

とっても、予想外な事に驚いて居た。

2ーAの教室

『というわけで、2ーAの皆さん3年になってからもよろしく願
いします。』

「よろしく、ユフィ先生ーっ!」

「先生、こっち向いてこっちっ。」

「ほら見て見てっっ学年トップのトロフィー！」

「おおっっ、みんなユフィ先生のおかげだねっ。」

「ユフィ先生がいれば中間テストもトップ確定だっ！！」

『いえいえ、今回の期末テストは皆さんが一生懸命に頑張ったのでトップクラスになったんですよ？なので中間テストも頑張りましょう。』

「「「はい！！」」」

「私、クラス委員長として2ーAが期末テストで万年ビリから脱出できてとっても嬉しいです。これもユフィ先生の勉強会のおかげですわ今後とも私たちクラス一同よろしくお願いしますユフィ先生。」

『はい、こちらこそよろしく申し上げます。』

「（確かに、あのガキの勉強会でうちのクラスは万年ビリから脱出できたけどーてかその前にそんな10歳のガキに担任教師させるこの学園何なんだよ！！労働基準法違反だろっ！？誰か突っ込めよーっ）」

千雨が、そんな事を心の中で思っていると……

「ハイッ、先生ちよつと意見が！」

『はい、鳴滝さん。』

「先生は、10歳なのに先生だなんてやっぱり普通じゃないと思います！」

鳴滝さん（姉）がそう言うとき千雨は……

「（おっ！？ よーしよしやっぱそうだな……やるじゃないか双子のツリ目の方……もっと言ってやれ）」

千雨が、そんな事を心の中で思っていると鳴滝双子が……

「えーと……。 」

「それで史伽と考えたんですけどー：今日、これから全員で「学年トップおめでどうパーティー」やりませんか!？」

「おーそりゃいいねえ！」

「やろーやろー、じゃヒマな人寮の芝生に集合ー」

鳴滝双子が、そんな事を言い千雨は……

「（前フリとカンケーないだろそれはっ。何、みんなで大喜びしてんだ私はこのクラスのこーゆー所について行けねーんだよっ!?!）」

千雨がそんな事を思いながら体をプルプルと震えさせて居ると……

『ーん? どうしました長谷川さん寒気がするんですか?』

千雨はいきなりユフィに、話し掛けられハッ：として

「いえ、別に……ちよっとおながが痛いので帰宅します。」

『え……あ、ちよっ：』

ユフィは、いきなり千雨がそう言い教室から出よとして教室に留めようとしたが千雨は教室を出た。

「ああ、千雨さんですか。いつもああですから放っといていいですユフィ先生。」

「それより、寮行ってパーティー始めよユフィ先生。」

夕映と桜子と鳴滝（姉）はそう言ったが……

『私、やっぱり長谷川さん呼んでから行きますので皆さんは先に寮に向かって居て下さい！！』

ユフィは、そう言い千雨を追いかけた！！

ユフィが、千雨を追いかけて居る時千雨は……

「（―そもそも、うちのクラスちよつといや普通におかしいんだよな：一年の頃から思ってたけど……異様に留学生が多いし全く次から次へと：しかも絡繰茶々丸アイツはあれだろロボットだろ何で誰も突っ込まないんだよ。どー見てもロボットだろ！？ロボ！き：極めつけはあの子供教師！！10歳って何だよ！！？ムキ！！ッあたしの普通の学園生活を返せ！！！！）」

と、心の中で思っ居ながら歩いて居ると……

『長谷川さ――ん！！』

「（Σげっ……その本人が来た！？）何か用ですか？（…こいつどうやって追いついたんだ？学校からの電車には乗ってなかったけど…）」

『ハアハア、あ…あの…：さっきおなか痛いって言ったのでこれ、おじいちゃんから貰った超効く腹痛薬です。おひとついかがですか……？』

「（……アホかこいつ……）結構ですもー治りましたので。」

『あ、あの…パーティーに来ないんですか……？』

「私、ああいう変人の集団とはなじめないんです。帰るのでついて来ないで下さい！！！」

『確かに、可笑しな人とか居ますが……。』

「（いやいや、オメーが一番変なんだよっ！くっ……まずい……また震えが……。）とにかく、私は行きませんのでこれで失礼します！！」

千雨は、ユフィを無視して自分が使って居るパソコンルームに入った。

「う……うわあああ……っ！！違うだろっフツの学生生活はこうじゃないだろっ。ハアハア……こ、この理不尽さを社会に……大衆にうつたえてやるっっ！！」

千雨は、独り言を言いながらコスプレに着替えてパソコンを起動させた。

「オツケー今日もちうは綺麗だぴょーん！！」

と言いながら、キーボードを打ち始めた。

「おハロー（＾Ｏ＾）／みんな元気ー！？ー今日はとっっても嫌な事があったよん（≧≦）うちのクラスの担任が変態でー！！ちうに色目を使ってくるんだよう。」

千雨は、そう言いながらキーボードに打っていきパソコンの画面には物凄い千雨の事を心配する文章やユフィ？の事を男性と思い誹謗中傷などの文章が書き込まれている。

千雨が、色々とパソコンに書き込んだり写真などで自分のコスプレ写真をパソコンに貼り付けて至福を感じて居た。

その頃、千雨の部屋まで来たユフィは……………

『ハア、あんまり本人の意志を無視したら駄目だし私だけパーティーに行きますか。』

ユフィは、その場を後にし学年トップおめでどうパーティーが行われる女子寮の桜の木がある芝生に向かった。

次回に続く!!

第九章：千雨さんとの初会合と期末テスト終了パーティー（後書き）

次は、エヴァンジェリン編です。

第十章：新学年と吸血鬼騒動！！（前書き）

エヴァンジェリン編前編更新です。

第十章：新学年と吸血鬼騒動！！

おはようございます、ユフィエル・スプリングフィールドです。

春休みも、終わり今日からまた新学年が始まります。

所変わって、3年A組の教室

「「3年！A組！！」」

「「ユフィ先生ーっ！！」」

『えと……改めまして3年A組担任になりました、ユフィエル・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間よろしくお願いします！！』

ユフィが、そう言う……

「「はい、よろしくー！！」」

と、元気な挨拶が返って来た。

『（ふふふ、こうして見るとまだまだお話ししてない生徒さん達も一杯居ますね。この一年間で31人全員と仲良くなれるかなあ……）』

ユフィが、そんな事を考えて居ると……

『——ん？（何でしょう、この鋭い視線は？）』

ユフィは、自分に視線を向ける生徒を探したするとただ一人此方を見る生徒が居た。

「……………」

『（…あの娘は……出席番号26番エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんで確か保護責任放棄男（糞親父ナギ）による呪いで此処麻帆帆良に約15年間もこ乃学園に居るのでしたね。えーと確か部活が囲碁部と茶道部……でしたけタカミチには困ったとき相談しなさいって言われたけどハアはつきり言って私は立派な魔法使いに成りたいとは思って居ないしね。しょうがない放課後エヴァンジェリンさんの家に行って呪いを解いて上げよう！！）』

ユフィが、そんな事を思っていると……

「ユフィ先生、今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなもすぐ準備してくださいね！！」

と、しずな先生が来てユフィにそう言った。

『分かりました、しずな先生!!では、皆さん此方で身体測定をしますので速やかに着替えて準備をしてください私は体重計と身長測定器を持ってきましたので。』

ユフィは、そう言い体重計と身長測定器を保健室に取りに向かった。

ユフィが、保健室に体重計と身長測定器を取りに向かう途中ルミアと会いルミアと一緒に体重計と身長測定器を3ーA組に持って行き身体測定をして居ると……

「ユフィ先生——っ大変や——つまき絵が…まき絵が——」

『落ち着いて下さい、和泉さん一体佐々木さんがどう大変何ですか?』

ユフィが、慌てて居る和泉亜子を落ちつかせよとしていると……

「「何！？まき絵が、どーしたの！？」「」」

保健室

身体測定を、終わった人達と一緒に保健室に向かったユフィとルミアは保健室に居たしずな先生にまき絵の容態を聞いた。

『しずな先生、まき絵さんの容態はどうですか？』

「ただ、桜通りで気を失って居る所を見つけたらしいのよ………
…」

ユフィは、しずな先生が言った桜通りと言う言葉に………

『（ああ、エヴァンジェリンさんですね。）』

ユフィは、エヴァンジェリンが犯人である事をすぐに分かった。

「ユフィ？ ユフィエル！！」

『Σ あ、ルミアさん。』

「あ、ルミアさんじゃないだろ！！ 先から呼んで言ったんだぜ？」

『すいません、少し考え事していました。』

「ハア、佐々木を襲ったのはエヴァンジェリンだろ？」

ルミアが、ユフィに犯人がエヴァンジェリンであるだと聞いて来た。

『気付いて居たんですね？』

「まあなあ…後、今日の夜に世界樹前広場に集まるよ学園長が言っていたから遅れるなよ？」

『分かりました。』

ユフィは、ルミアにそう言った。

保健室から出た、ユフィはエヴァンジェリンを探していた。

『（エヴァンジェリンさんは、一体どこに居るんでしょう？）』

ユフィが、エヴァンジェリンを探していると……

「先生、私に何か用か？」

ユフィは、自分と呼ぶ声が後ろから聞こえ後ろを向くとそこにはエヴァンジェリンが居た。

『エヴァンジェリンさん、探したんですよ。』

「私に何の用だ？」

エヴァンジェリンは、ユフィに用事は何か聞いて来た。

『私の用事は、あなたの呪いの事です。』

「Σ何!？」

エヴァンジェリンは、ユフィのその言葉に驚いた。

『明日、あなたの呪いに付いてお話があるので時間を開けておいて貰えないでしょうか？』

「分かった、明日だな時間を開けておくから私の家に来い。」

『分かりました、では私はこれで。』

ユフィは、その場を後にした。

次回に続く!!

第十章：新学年と吸血鬼騒動！！（後書き）

次回は、エヴァンジェリン編中編の更新です。

第十一章：学園の魔法先生と魔法生徒との初会合！！（前書き）

エヴァンジェリン編中編更新です。

第十一章：学園の魔法先生と魔法生徒との初会合！！

こんばんは、只今ルミアさんとアスランさんと世界樹前広場に向かって居るユフィエル・スプリングフィールドです。

『あの、ルミアさん・アスランさんもしかして今日呼ばれたのて正式に私が麻帆良学園の教師になったから本格的に警備員の仕事をする為に呼ばれたのでしょうか？』

ユフィが、ルミアとアスランに聞いて来た。

「多分、そうだよ？」

「まあ、あんまり緊張しない方が良いですよ？」

ルミアとアスランと喋っていると世界樹前広場に着いた。

「待ったぞー！！」

世界樹前広場に着くと学園長がユフィとアスランとルミアにそう言った。

『あの、この方達はもしかして？』

「うむ、ユフィ君にはまだ紹介していなかったの。」

ユフィが、世界樹前広場に集まって居る人達の事を聞くと学園長が

……

「ここに、集まっとるのは学園都市の各地に散らばる小・中・高・大学に常時勤務する魔法先生……及び、魔法生徒達じゃよ全員ではないがの。」

『そんなですか、通りで瀬流彦先生と式集院先生とガンドルフィーニ先生とシャークティ先生達から魔力が感じられたんですね。』

ユフィが、そう言うとその場に居る学園長と魔法先生と魔法生徒達は驚いた。まあ驚くのは当たり前だそりゃあ普段は最小限に魔力を抑えてバレないようにしているのだから。

「流石は、あのサウザンド・マスターの娘だね!!」

ガンドルフィーニは、最初は驚いたがユフィにそう言った。

「ふむ、さて今回ユフィ君を呼んだのは今日から正式に学園の警備をして貰う為じゃ。」

学園長は、ユフィにそう言ったが……

「まあ、その為にユフィ君君の実力を計るために高畑君と戦って貰う事にした。」

学園長は、そう言った。

『分かりました、タカミチ私の実力見せてあげる。』

「分かったよ、ユフィ君。」

こうして、ユフィは警備員の本格的な活動をする為にタカミチと勝

負する事になった。

「この試合での、勝ち負けは無い代わりに儂や他の魔法先生や魔法生徒達に実力を見せて貰う良いかなユフィ君？」

『はい、分かりました!!』

「では、試合開始!!」

学園長の合図で、ユフィとタカミチの試合が始まった。

『（やっぱり、原作通りタカミチはポケットに両手を入れている事から「居合い拳」を使うからアゴに居合い拳を喰らわないようにしないと……!!）』

「さあ、やろうか。ユフィ君？」

『そうだね、行くよタカミチ!!』

私は、戦いの歌と風楯と瞬動術を使いタカミチに向かって突こんで行ったが……

風楯の障壁はタカミチの「居合い拳」により消し飛んだ!!

『（何とか、タカミチの後ろに回れた此处からが本番だ。）』

ユフィは、後ろに回ってタカミチの方に振り向きながらタカミチの「居合い拳」を交わしてもう一度瞬動術を使い……

『（間に合えっ）八極拳金剛八式翻身伏虎!!』

ユフィは、タカミチに翻身伏虎を放ったが左腕で防がれたが……

『硬開門！！！』

ユフィは、タカミチに翻身伏虎を防がれた後すぐに次の技硬開門を
タカミチの鳩尾に喰らわし次の攻撃に移り……

『魔法の射手・雷の一矢 弓歩沖拳！！』

素早く、タカミチに喰らわしたがまた左腕で防がれた。

「（これ程とは……なる程…中国拳法ってのは色々やってきてやり
づらいなあ。ユフィ君ウェールズで誰か中国拳法の達人から習った
のかな？）」

タカミチが、そんな事を思っているとユフィが瞬動でタカミチの顔
付近まで移動して来て攻撃をするがまた防がれたがユフィはタカミ
チに攻撃を続けた。

『タカミチこれで、終わりです。魔法の射手！！集束・雷の三矢！
！雷華崩拳！！』

「ぐっ！？」

タカミチは、ユフィの攻撃を喰らい飛ばされた。

「そこまで、この勝負ユフィ君の勝ちじゃ！！」

試合は、学園長に止められユフィはタカミチとの警備員試験の試合

に勝った。

「いや、ユフイ君強いね〜まさか中国拳法を使えるとは……」

『タカミチ、大丈夫?』

ユフイの最後の攻撃によって、吹っ飛んで行った場所から戻って来たタカミチはユフイにそう言い誉めたがユフイは逆にタカミチを心配した。

「僕は、大丈夫だよユフイ君。」

タカミチは、心配するユフイにそう言った。

「さて、ユフイ君。君はタカミチに勝ったので明日から学園の警備をして貰うぞ?」

『はい、分かりました。』

「よろしいでは、皆の者解散じゃ!!」

学園長が、そこに居た魔法先生と魔法生徒達にそう言い集まりを解散し帰って行った。

次回に続く!!

第十一章：学園の魔法先生と魔法生徒との初会合！！（後書き）

次は、エヴァンジェリン編後編を更新します！！

第十二章：エヴァンジェリンの呪い解放！？（前書き）

エヴァンジェリン編後編です。

第十二章：エヴァンジェリンの呪い解放！？

こんにちは、ユフィエル・スプリングフィールドです！！

只今、私はエヴァンジェリンさんの家の前に居ます。

カランコロソ♪

『こんにちは、エヴァンジェリンさん居ますか？ユフィエル・スプリングフィールドです。』

私は、家の前にある呼び鈴を鳴らして自分が来た事を告げたら

「ユフィ先生、こんにちはマスターなら居間に居ますよ。」

と、家のドアから出て来たのは茶々丸さんだった

『そうですか、ありがとうございます茶々丸さん。』

私は、茶々丸さんにそう言いエヴァンジェリンさんが居る居間に向かった。

只今2人エヴァンジェリンとユフィエルが卓袱台を挟んで座っていた。

「それで、ユフィエル先生私の呪いを解いてくれるのか？」

エヴァンジェリンさんが、私に聞いて来た。

『ええ、あの保護者放棄男（糞親父）があなたに掛けた登校地獄及び魔力抑制を私が解きます！！』

「ハハハ、やっとこの忌々しい呪いから解放される。」

エヴァンジェリンが、呪いから解放されるのを嬉しく思っているとユフィが……………

『エヴァンジェリンさん、私があなたの呪いを解くにあたって保護者放棄男事千の呪文の男の生存情報をあなたに提供しましょう。その代わりに私の願いを三つ聞いてくれますか？』

私は、エヴァンジェリンさんにそう言った。

「何、奴が……ナギが生きているだと？」

エヴァンジェリンさんは、保護者放棄男が生きている事に驚いた。

『ええ、あの保護者放棄男は台所に居る黒光虫のごとく何処かで生きていますし6年前の雪の夜にあの保護者放棄男に私や村の皆さんは会いました。』

「ハハハ、そーか！奴が生きているか。」

私が、エヴァンジェリンさんに保護者放棄男が生きている事を言うと高笑いしながら嬉しそうだった。

「まあ、奴が生きている事は分かったが何故ナギを保護者放棄男と呼ぶんだ貴様は？」

エヴァンジェリンさんは、私にそう聞いて来た。

『そうですね、実は私生まれた時から前世の記憶が合ってそのお陰で意識がありあの保護者放棄男と母アリカが言い争っていて私をこのまま自分達が育てると言う母アリカの意見を無視してあの保護者放棄男は私が居る為に自分の行動が制限される為私を自分の故郷の村に預けたのです！！それに私は預けられる時まだ生まれて半年しか経っていませんでした。』

それを、聞いたエヴァンジェリンは

「Σ何、前世の記憶がありそのお陰で意識があってナギと母親の言い争っている所を見てしかも生まれて半年でナギの村に預けられただど！？」

エヴァンジェリンさんは、そう言い驚いた。

『まあ、私はあの保護者放棄男がどう思って私を村に預けたか分かりませんが許すつもりは無いです。』

「別に、良いんじゃないか？許さなくて私が言うのもあれだが生まれて半年しか経っていないお前を村に預けたのだからな。」

エヴァンジェリンさんは、私にそう言った。

「それより、早く登校地獄及び魔力抑制の解呪をしろ。」

『それでは、私の三つの願いを聞いて貰えるのですよね？』

私が、エヴァンジェリンさんにそう聞くと……………

「分かった、お前の三つの願いを聞いてやる私は誇り高い悪の魔法使いだからな!!」

エヴァンジェリンさんは、私にそう言い私はエヴァンジェリンさんの呪いを解く為にエヴァンジェリンさんの体に自分の魔力を流し登校地獄と魔力抑制の術式を解除した。

『どうですか、エヴァンジェリンさん登校地獄と魔力抑制の術式を解除しましたが……………』

私は、エヴァンジェリンさんに聞いた。

「ああ、大丈夫だ呪いは解けたそれに魔力も少しずつだが戻って来ているお前のお陰だ。」

『そうですか、良かったです!!』

私は、そう言った。

「それで、呪いは解けたんだお前の三つの願いを聞こうか？」

エヴァンジェリンさんは、私の三つの願いを聞いて来た。

『私の三つ願いは、一つ今後一切の敵対行動を禁ずる。二つ私に闇^{マギア・エレベア}の魔法を教えて下さい。三つ私や他の先生達の授業に必ず参加して下さい。』

私は、エヴァンジェリンさんにそう言った。

「まあ、私は誇り高い悪の魔法使いだその願い聞いてやろ!!」

『ありがとうございます、エヴァンジェリンさん。』

「私の事は、闇^{マギア・エレベア}の魔法を教えるのだから師匠と呼べ。」

『分かりました。』

それから、少し喋った後私とエヴァンジェリンさんは家を出て学園長室に居る学園長にエヴァンジェリンさんの呪いを解除した事を言
い学園長はとっても驚いたのは言うまでも無い!!

おまけ

エヴァンジェリンさんの呪い解除から数日後カモがユフイエルの所に来た。

次回に続く！！

第十二章：エヴァンジェリンの呪い解放！？（後書き）

次回は、修学旅行に行く前の話を書きます。

第十三章：正義何それ、美味しいの？そして私をあの手者放棄男と一緒にす

大変、お待たせしました第十三章更新です！！

第十三章：正義何それ、美味しいの？そして私をあゝの保護者放棄男と一緒にす

こんにちは、ユフィエル・スプリングフィールドです。

エヴァンジェリンさんの呪いを解いてからあれから2日が経ち私今学園長室に居る。

何故、学園長室に呼び出されたかは修学旅行で京都の関西呪術協会の長でこのかさんの父親で元紅き翼のメンバーで保護者放棄男の仲間の近衛詠春に親書を渡して来て欲しいというものだった。

・・・・・・こういうのを私に任せるのは得策ではないのですがね、なるようにやるしかないですね。

私一人では不安なのでエヴァジェリンさんも連れて行きますのでと学園長に言うのと渋々承諾して他の魔法先生達にはちゃんと学園長に説明して貰った。

そして近づくは修学旅行。

陰謀渦巻く京都で彼女は、運命の出会いと彼女がお世話になって居る二人の宿敵と出会う！！

学園長室から出た私は、家に帰り対京都戦の計画を練って居た。

私が気にしているのは、木乃香さんの護衛と刺客対策だ。

木乃香さんの護衛に関しては桜咲さんと協力して行えばなんとかいけるかもしれないが、油断は禁物なので保険として彼女達3人に協力して貰うとしよう。

後刺客対策は、同じく桜咲さんやエヴァンジェリンさんや茶々丸さんの協力が必要ですね。

翌朝、私はルミアさんとアスランさんと一緒に修学旅行で必要な物を買う為に渋谷に来たのだが何故か木乃香さんと会って明日菜さんの誕生日プレゼントと一緒に選んで欲しいと言われ私は明日菜さんとはあれ以来（図書館島の時）あんまり喋っていませんし仲もそこまで良くないのですがと私が木乃香さんにそう言うと言フイ先生、あの時図書館島から出て寮に戻って明日菜が私にこう言ったんよ。私を本気で怒ってくれる人何て高畑先生以外居なかったからちょっと嬉しかったて明日菜はそう言うておったよと木乃香さんは私にそう言った。

それから、私とルミアさんとアスランさん木乃香さんは何とか明日菜さんにあげる誕生日プレゼントを買い私は木乃香さんと一緒に寮に戻り明日菜さんに誕生日プレゼントを渡し明日菜さんからお礼を言われ私はルミアさんとアスランさんと一緒に家に帰って行った。

家に帰って来た、私とルミアさんとアスランさんは夕飯を食べようとした時学園長から電話が掛かって来て学園長から学園長室に来て欲しいと言われ私はルミアさんとアスランさんに学園長に呼ばれた事を言い学校に向かった。

学校に着いた私は、学園長室に向かい学園長室に着きドアをノックし学園長から入ってよろしいと言われ学園長室の中に入ると何故かガンドルフィーニ先生とタカミチや刀子先生やシスターシャーケティや神多羅木先生が居て私は学園長にどのような用件かと聞いた。

「用件と言うのは、ガンドルフィーニ先生がの何故エヴァの登校地獄の呪いを自分達に言わず解いたのかとユフィ先生に聞きたいと言うので呼んだのじゃ!!」

と、学園長が私にそう言うと言ったガンドルフィーニ先生が話し掛けて来た。

「先程学園長も、言っていたが何故私達に内緒でエヴァンジェリンの登校地獄の呪いを解いたのかい？」

『そんなの、ガンドルフィーニ先生達には関係ないじゃないですか
この事は私があゝの保護者放棄男がエヴァンジェリンさんの登校地獄
の呪いを解きに来ないから私が変わりに解いたまでです。それを呪
いを解いただけでとやかく言われる筋合いありません!!』

私が、そう言うときガンドルフィーニ先生は……

「彼女は、悪の魔法使い何のだよそれを立派な魔法使いで英雄のナ
ギさんみたいに成る君が彼女の呪いを解くとはどういう事だ!!」

私は、ガンドルフィーニ先生その言葉にキレた

『私を、あの保護者放棄男と一緒にしないで下さい!!』

「何を、言っているだナギさんが保護者放棄男? 何かの間違いでは
ナギさんは私達立派な魔法使いの憧れなのだから。」

それを、聞いた私は……

『では聞きますが、何が正義で何が悪なんです? たとえば親も居な
く、たった一人で、ろくな食事にもありつけず飢えている少年・少
女が、たった一切れのパンを盗むことは悪と言うのですか? 私の言
うこれがあなた達が言う悪と言うのなら私はあなた達を悪だと思
います。では、私はこれで失礼します。』

私は、ガンドルフィーニ先生達にそう言うとき学園長室から出てルミ
アさんとアスランさんが待つ家に帰った

次回に続く!!

第十三章：正義何それ、美味しいの？そして私をあゝの保護者放棄男と一緒にすゝ

次回は、いよいよ京都修学旅行編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419q/>

魔法先生ネギま ネギTS成り代わり小説

2011年5月23日18時57分発行